

ミュージカル「ビルリー・エリオット」鑑賞

外国語学部 英語英文学科4年
伊勢加奈子・菊池暖・小林亜椰・白澤ことみ・宮崎あげは・柳莉里子

英語英文学科3年 田村唯



劇場前の「ビルリー・エリオット」看板

二〇二四年十月五日に、外国語学部英語英文学科鈴木ゼミの三・四年生の希望者は、東京建物Brilia HALLで「ミュージカル ビリー・エリオット ~リトル・ダンサー~」を観劇しました。参加者の感想の一部を報告します。

伊勢加奈子

この作品では主にビルリーが様々な困難を乗り越え立派なバレエダンサーになるまでが描かれてい

る。「努力をし、諦めなければ夢は実現できる」というテーマだが、愛する妻を失い、政府と炭鉱夫たちの抗争の中心で葛藤する父親や、自分のセクシュアリティに気づきながらも隠して生きるマイケルなど、ビルリーの環境や周囲の人々にも焦点を当てている。世間の流れに合わない者、集団の中で違う行動をとる者、理想とは異なる行動をする者が排除される世の中で、彼らは自分で考え、自らが選んだ道を進んだ。そして、それはビルリー

にとって大きな支えとなり、のちの成功につながった。「正しい」とは「らしさ」とは何をもって定義されるのか、この作品に出会えたことはそれらを改めて考える良い機会となった。

菊池暖

好きなことをやるビルリーの眩しさと炭鉱夫たちの迫力ある歌声が入り交じった、きらびやかなミュージカルでした。「自由」というワードがよく出てきて、自由に生きることへの讃歌のようなミュージカルと思えました。「自由に生きる」。口にするのは簡単だけれど、実践するのはすごく難しいと思います。周りの環境が自分らしく生きようとするのを阻むこともあります。ビルリーは何もかもに恵まれているわけではなかったけれど、自分を突き動かすものを信じて歩み、最終的には街の人々の支えもありながらさらに前へ前へ進んでいきます。その力強い姿に勇気ももらいました。

小林亜椰

映画と舞台を比較して楽しめました。お母さんとの会話が増えたり、ストになる過程を最初

に話したりするところなど、一瞬間で舞台から入った人にも分かりやすく共感的にできると感じました。ピリーの影を使った表現がとても好きでした。バレエをする男の子の役ということもあると思いますが、指先から指先まで細部に気を配って表現していることが視覚として意識しやすく、より素直に受け取ることができました。舞台と映画は別物でどちらも素敵なオリジナルと考えていたのですが、影を使ったこのシーンは映画で見るとピリーと重なる姿が見られてとても面白かったです。

白澤 ことみ

演出方法に驚かされた。踊るピリーに照明が当てられ、背後に大きな影が映り込んだときは一人の役者が本当に二人いるような迫力を感じた。ピリーが我を忘れて踊りに耽る時にはワイヤーが用いられ、宙を舞うような心地で踊るピリーの心情が視覚的に表現されていた。映画のピリーの父は高圧的な態度で、私が萎縮しそうなほどだったが、舞台では厳しいながらも家族間の仲が緩和されていた上にコミカルさが加えられており、緊張せずに観劇することができて楽しかった。

田村 唯

初めてミュージカルを見たので何といえはいいかわからないが、最初の炭鉱の演出やマイケルが女性の服をたくさん着るシーンなど迫力があつた。少年のピリーと大人のピリーが踊る時、少年

は体が柔らかいので足を高く上げられる一方、大人は高くジャンプでき、椅子回し、椅子の右側からの側転など、ものすごくきれいだった。最後のほうで、ピリーが学校に向かうときに炭鉱の人たちが贈る歌にもとても感動した。スタンディングオベーションとはどういうものなのか理解できなかった。

宮崎 あげは

マイケルが強く印象に残った。ピリーの人生に欠かせない友人のマイケルは、バレエを続けるか悩むピリーに対して「女らしく、男らしく」じゃない「自分らしく」て何が悪い？と背中を強く押した。多様性という言葉をよく目にする現代の私たちにとってはその通りだと頷ける言葉だが、当時は反対されるに決まっている。男がバレエなんて、と否定的な言葉を吐き続けるピリーを前に、好きな格好をして踊るマイケルのシーンには手拍子をしながら自然と涙が出た。キラキラした舞台とは裏腹にマイケルの芯の強さが見えた気がした。マイケルがピリーを送り出すラストシーンでは二人の幼くも真っ直ぐな言葉と笑顔に私も背中を押してもらえた。

柳 莉里亭

とても満足感がありました。歌、ダンス、音楽や照明などの演出によって作品の世界に入り込んで楽しむことができました。マイケルが女性の服を着てピリーと踊り、自分がいたい自分でいよう、

という言葉を贈っていたり、バレエは女性がやるものだと主張していたピリーのお兄さんやお父さんが最終的に応援するようになったりする場面では、舞台の設定の時代におけるイギリスでの性別による区別や、価値観が変化していく様子が興味深かったです。ピリーやマイケルのように既存の価値観に疑問を持つ姿勢や自分らしくいようとす姿は現在でもなお大事なことでであると改めて感じました。



参加者一同でポーズ